

資本主義，その生成の理論のために

— 交易者余剰と貴金属通貨の投資機能 —

有 田 稔

目 次

1. はしがき
2. 経済学における理論的前提の二つの不備
3. 通貨の利潤実現機能
4. 通貨の差額決済機能
5. 通貨の投資機能
6. 担保——通貨投資機能の傍証——
7. 現在の管理通貨増加のありかたと通貨増加の基本原理
8. 交易と経済成長
9. 多様性の追求と効用価値の増大
10. 交易者余剰
11. 貴金属通貨と資本主義成立への経済史的アプローチ
12. あとがき

1. はしがき

本稿は、徳山大学経済学会が独立後第1回の学術研究発表会（昭和61年10月15日、於・徳山大学）において、学内外多数の来聴をえて口頭発表したものを土台としてまとめたものである。

本稿では、

1) 「通貨」という表現は概念に幅広い包括性をもっており、ヨリ便利であるから、「貨幣」という表現は極力避け「通貨」という表現を主として

使用している。

2) 経済学にはミクロ分析(微視的分析, micro analysis)とマクロ分析(巨視的分析, macro analysis)とがあるが、後者、マクロ分析に属するものである。

3) 「利潤実現」とは私企業の剰余生産物の貨幣化(通貨化)を意味し、「利潤」とは私企業資本家の純所得を主として意味する。

4) 物々交換・交易によって双方が利益を得たと思うとき、それは職業的・社会的分業のおかげであって、たしかに社会は豊かにはなるが、その段階ではここでいう正確な意味での利潤実現ではない。

5) 事前的分析と事後的分析との間には見落としがちな大きな相異が存在していると思われるので、事前的分析と事後的分析をできるだけ明別しようとの意図をもっている。

2. 経済学における理論的前提の二つの不備

本稿で問題にしたいのは、剰余生産物の買手・利潤の実現者は誰なのかということである。換言すればマクロでみたとき剰余生産物を貨幣化し、利潤に変える通貨の所有者は誰なのかということである。

古典派、正統派、近代経済学派、マルクス経済学派の別なく、経済学と名のつくほとんど大部分のものは、(1)経済理論の上では、二つの人口集団しか認めていない。すなわち、「企業と家計(もしくは個人)」とか「資本家と労働者」とか表現の相異はあっても、二つの人口集団でもって経済理論を構築しようとしているのである。また、(2)経済的理論を一国民経済という単位で完結しうるものと考え、封鎖体系的に構築している。外国貿易なき資本主義は実在しないとしても、経済理論は外国貿易を捨象してなりたちうるというのである。

すなわち、次のように考えるものも存在するのである。「資本制的生産は総じて対外商業なしには実存しない。だが、与えられた規模での正常な年々

の再生産が想定されるならば、それによって次のことも想定されている。すなわち、対外商業によっては、使用＝および現物形態を異にする財貨によって国内の財貨が填補されるにすぎず、価値比率は、——したがってまた、生産手段および消費手段なる二つの部類が転態されあう価値比率も、これらの各生産物部類の価値が分かたれうる不変資本・可変資本・および剰余価値の比率も、影響されないということ、これである。だから、年々再生産される生産物価値の分析に対外商業をもちこむことは、ただ混乱を生じうるのみで、何らの新たな契機も——問題のものであれ、その解決のものであれ——提供しない。だから対外商業はまったく捨象されるべきである。」¹⁾(傍点——有田)

以上のような次第であるから、マクロ的にみて拡大しつつある経済、成長しつつある経済について物的増加は理解しえても、実際に物的増加を可能ならしめるに必要な通貨増加について、それが何処から、如何にして供給されてくるのか、誰が供給するのかについて明確な理論は存在しないと私は主張したいのである。労働者とか家計とかの表現をもつ人口集団は資本家の投下した額以上の通貨はもちえない。また他面から考えれば、剰余生産物とは労働者が受け取ったり消費したりしないから「剰余」と呼ばれるのである。この剰余部分は貨幣化されない限り利潤ではなく単なる過剰在庫にすぎない。

貨幣を捨象するのならば次のことが解明された上でなければならぬ。すなわち、物々交換による取引に剰余が存在するのかわからないのか、存在するとすれば、その剰余はどのようにして資本として出動することが可能となるのかを説明できない限り、資本主義経済について外国貿易を捨象して考えるとはいえないのではないか。

外国貿易を捨象する考え方は、古典派経済学に強くみられた分配論的見方によるものであり、事後的分析によることから生ずるものである。それは一種の結果論である。もし資本主義経済についての理論を事前的に分析・考察

注1) カール・マルクス著、長谷部文雄訳、『資本論』(5) 青木文庫、第二部、第一分冊、616-617頁。(Karl Marx, "Das Kapital, II, S. 474)

するならば、利潤実現、すなわち剰余生産物を貨幣化するための通貨の問題につきあたる筈である。

このような、剰余生産物を貨幣化するための通貨は誰が生み出すのか、誰がもっているのか、どこからあらわれるのかという疑問をめぐって早くから次のように問題を提起している者がいる。

「だが待った！ 社会は——資本主義の支配下でも——資本家と賃労働者とだけから成り立っていない。この両階級のほかになお、土地所有者、使用人、自由職業者すなわち医師・弁護士・芸術家・科学者・というような一大人口集団があり、なおその牧師や僧侶をもつ教会があり、最後にその官吏と軍隊をもつ国家がある。すべてこれらの人口層は、範疇的な意味での資本家にも労働者にも数えるべきではない。だが彼等は社会によって養われかつ維持されねばならぬ。したがって、資本家および労働者以外のものから成り立つこの人口層の需要が生産の拡大を必要ならしめるのだ、といえるかもしれない。だがこの逃げ路は、仔細に観察すれば外観上の逃げ路にすぎない。土地所有者は、地代すなわち資本制的剰余価値の一部分の消費者として、明らかに資本家階級に数えられるべきであり、彼らの消費は、剰余価値が未分割の最初の形態で考察されるこのばあいでは、すでに資本家階級の消費のなかで顧慮されている。自由職業者は、彼等の貨幣手段、すなわち社会的生産物の一部分にたいする彼等の手形を、ほとんど直接または間接に資本家階級の手から得るのであって、資本家階級はその剰余価値のかけらを与えて彼等を満足させる。そのかぎりでは彼等は、その消費にかんしては剰余価値の消費者として資本家階級に導入されるべきである。同じことは僧侶についてもいえるのであって、ただ僧侶は、その貨幣の一部分を労働者すなわち労賃からも引きだすわけである。最後に、官吏と軍隊をもつ国家は租税によって維持されるのだが、この租税は剰余価値からでなければ労賃から出ている。総じて吾々は、ここでは——マルクスの表式の限界内では——社会における収入のただ二つの源泉——労賃または剰余価値——しか知らない。かくして、資本家および労働者以外の前述のすべての人口層は、この両収入種類の共同

消費者としか看なされえない。マルクス自身、買手としてのこの『第三者』を逃がみちとして挙げることを拒否している。——『労働を以てすると否とをとわず、直接に再生産に携わらない社会成員はすべて、年々商品生産物に対する彼等の分前を、つまり彼等の消費手段を、生産物を第一番に入手する諸階級——生産的労働者、産業資本家および土地所有者——の手からのみ引き出すことができる。そのかぎりでは彼等の収入は、実質的には、労賃（生産的労働者の）、利潤および地代から派生したのであり、したがって上の本源的収入に対しては派生的収入として現象する。だが他面、この意味でのかかる派生的収入の受領者たちは、王、僧侶、教授、淫売婦、兵卒等としての彼等の社会的機能によってこの収入を得るのであり、したがって彼等は、彼等のかかる機能を自分の収入の本源的源泉だと看なすことが出来る』と。利子および地代の消費者を買手としてあげることに對してマルクスはいう。——『だが、商品での剰余価値のうち、産業資本家が地代または利子として他の剰余価値共有者に譲渡しなければならぬ部分が、久しきにわたって商品そのものの販売より実現されえないならば、地代または利子もできなくなり、したがって土地所有者または利子取得者は、地代や利子の支出により、年々の再生産の一定部分の任意な貨幣化に救いの神として役立つことはできない。いわゆる不生産的労働者たる官吏、医師、弁護士、等々のすべて、その他、経済学者たちの説明できないことを説明するために“大衆”の形態で彼等に“奉仕”する人々の支出についても、事情は同じである』²⁾と。

以上みたように医師・弁護士を代表とする人口集団は、資本家が投資を行い、それによって労働者が労賃を得、その後資本家が利潤を得た後に、それらの一部を受け取って初めて購買力をもつのであって、合理的に思考するならば、資本主義経済社会の論理的出発点において初めから資本家達の剰余生産物を貨幣化するための通貨（購買力）をもつものとは考えられないのであ

2) ローザ・ルクセンブルグ著、長谷部文雄訳『資本蓄積論』(上)青木文庫、134-136頁。(Rosa Luxemburg: Die Akkumulation des Kapitals, — Ein Beitrag zur Okonomischen Erklärung des Imperialismus, Frankes Verlag in Leipzig, 1921)

る。

いふなれば、労働者でも資本家でもないこの第三の人口集団は、直接生産者たる労働者・資本家の社会的・物的扶養家族に相当するものである。別の見方をすれば、この第三の集団は、抽象的ターム (term) を、一期ずらした事後的時間帯にはじめて生存しうるものである。

さて、直接生産者たる労働者・資本家が生産を終え、生産物を販売して資本家が利潤を得たとき、その時点ではその社会の通貨の総量は増加している筈である。初期資本主義時代には金銀が通貨として信頼され、交易差額を埋めるための決済に使用されていたが、この金銀増加分を獲得した側の経済圏は通貨が増加し、自己の圏内で購買力が増加し、剰余生産物の利潤を実現させることが可能となると考えざるをえないのである。

3. 通貨の利潤実現機能

前節でみたように、どの資本家も資本家という資本家は皆、自分の投下資本額以上に通貨を回収しようとしており、順調に資本主義経済が運行しているときには、ほとんどの資本家は目的通り投下資本額以上の通貨を手に入れているから、マクロ的にみたときには当然社会の総通貨量は増加している筈である。だから、不換紙幣が存在せず信頼度の高い貴金属通貨が使用されていた初期資本主義時代には経済が順調に成長していたときは当然貴金属通貨の増加があったにちがいないのである。

この状態は、換言すれば、ほとんどの資本家が剰余生産物を貴金属通貨にかえること (利潤実現) ができていたということの意味している。不換紙幣なしに。

だから、ちなみに近代資本主義の先駆者英国についてみれば、金 (キン) は次のような状況にあった。

「葡萄牙 (ポルトガル) は年々ブラジルから貨幣、もしくは板の形で国内商業に使用される以上に沢山の金を受取っている。この余剰は死蔵するには

あまりに尊い。又国内には有利な市場を発見することが出来ないから，禁止令のあるにも拘らず外国に送られ，国内に一層有利な市場を有する貨物と交換される。その大部分は英国品の代償として，又は英国を通じてその代償を受取る欧州諸国の品物の代償として，年々英国に来るのである。」³⁾さらにその当時の英国の，対ポルトガル，スペイン，イタリーとの貿易に関して「これ等の国民の何れに対しても英国は輸出超過である。即ち貨幣によって平衡される。」⁴⁾といわれている状況であった。

4. 通貨の差額決済機能

前節でみたごとく，交易をおこなうにあたっては，物々交換のできる範囲はお互いに相殺できるが，取引の当事者間で相殺してもなお差額が生じると双方とも認めたととき，多すぎる方が，その余った品物を持ち帰るか，少ない方が何かでその差額を埋め合わせるか，の二者択一となる。この場合多すぎる方がその差額分を取引からひきあげるよりも，少なすぎる方が，その差額を埋め合わせべき何かを提供できる方が交易量が大きく無駄や損失がでないことは論をまたないところである。貴金属がその働きをしていた。しかし，いかなる時代でも，どの国も自国の必要とするだけの貴金属を産出できるとは限らないから，地中海交易時代といえども，前節にみたのと同じように，貴金属は交易によって貴金属産出国から流入補給されていた筈である。

この交易差額を，持ち運びのできない土地や家屋で埋め合わせうる場合は例外的であって基本的にはありえないことである。埋め合わせ物が宝石や貴金属であれば，運搬性があり，嵩^{かさ}が少なく非常に便利である。しかし貴金属

3) 野村兼太郎著『英国資本主義の成立過程』，有斐閣，昭和12年初版，昭和23年再版使用，284頁。(「徳山大学論叢」25号，1986年6月，拙論「独立投資発生の原理に関する試論」参照。Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, The Modern Library, New York, Editor, Max Lerner p. 513. (ed. by E. Cannan, vol. II, pp. 46-47)

4) 野村兼太郎，同書，274頁。(「徳大論叢」25号，拙論，同上，参照)

に比べて宝石は分合が自在でなく、分割すればするほど加速度的に価値減少をおこし、交換や価値保蔵に不便である。

そこで当然、分合が自在で運搬性、交換性、価値保蔵の高い貴金属が交易差額を埋めあわすものとして最適となるのであるが、このことは貨幣についての周知の基本概念でもある。

いうまでもなく、不換紙幣や証書類は、それに対する公的保証が無くなれば紙片にすぎなくなる。貴金属は通貨であるとともに物理的不変性の高い商品でもある。したがって、金（キン）は不換紙幣とは違ってそれ自体で社会的・政治的保証とは独立に価値を保蔵しうる。だからこそ金（キン）は、不信と危険を伴う異民族間・国家間の交易上最も信頼される通貨となりえたのである。

このような、金本位制時代までは自明のことであった貴金属が貿易差額の埋め合せ・取引の決済に最も適したものであるということ、ここで再確認しておくことが本稿の論旨の上で必要なことであった。

5. 通貨の投資機能

この節では少し新奇な説を展開するので、少し具体的に述べることにする。

さて、新しく投資活動を始めると仮定して、過去に通貨として用いられた羊、牛、穀物を具体的に思い浮かべながら、それらの通貨を用いてマニュファクチュアの工場を新設するとしよう。そのために土地を購入し、機械・道具類を購入し、材料を集め、労働者を雇う場合、上述のような通貨では非常に困難なことが実感されるであろう。羊や牛を代価として受け取った者は、それらに毎日のように餌を与えねばならないし、穀物といえども量は嵩^{かさ}ばるであろうし、その保管と品質保持に費用や設備、労力を必要とする。

何よりも問題となるのは、各取引相手の必要とする品物の種類や量が種々雑多であり、単一品では効用が逡減するので、ある段階で受け取りを拒んだ

り、取引を拒否する者が出たりするであろうことである。ヨリ具体的に言えば、牛半頭分の支払いということになれば牛肉がそれだけの量必要としないときには、残った半分の死牛を処分することが必要となるということである。何はともあれ、その不便さは明らかである。

ところが、相手に渡す通貨が、普遍的・一般的購買力をもち、必要な価値に応じて必要な分量に分合でき、間接・直接に誰の欲望や欲求にも応ずることのできる貴金属通貨であれば、取引相手に彼の必要とする種々雑多な品物を取り揃えて渡したのと同じ効果をもつのである。通貨のもつこの便利さが、通貨に投資機能を与えている。すなわち投資活動が円滑に行われるためには通貨の存在が不可欠である。したがって資本主義が成立するには通貨の働きが不可欠なのである。資本主義経済を分析し、理解しようとするとき「通貨を捨象」して行うことは論理上できないというのが本稿の主張なのである。通貨なくしては円滑な投資はありえず、円滑な投資の発展なくしては資本主義はありえないからである。

6. 担 保——通貨投資機能の傍証——

この節では、前節でみた通貨の投資機能をヨリ明確にするために担保というものについて考察することとする。

さて、投資を行うために担保を提供して資金を借りるということは今日では日常茶飯事であるが、これは一体、本質的には何を意味しているのか。

財産ではあるが、土地・家屋・宝石等のままでは一般的購買力を持ちえないから、さまざまな生産に必要なものを買集めることができない。つまり、家屋を削って労賃として渡すことはできないし、土地を一部分譲渡するとしても、例外的少数を別とすれば、運搬できないなどの理由でことわるのが普通であろう。宝石の場合も、分割できないので多すぎる場合には使用することができない。

そこで、土地・家屋・宝石等を担保として提供し、通貨を借りるというこ

とが発生する。このことは、とりもなおさず財産を一時的に流動化し、通貨資金とすることによって一般的購買力を手に入れるということである。

これによって、穀物や衣服・日用品等を物交によって寄せ集め、それらを賃銀として労働者を雇傭するという非常な繁雑さから解放されるのである。もちろん材料入手のための物交も繁雑であることは想像するに困難なことではない。

かくて、この通貨資金によって、種々の多くの必要物を買集め、結合して生産組織を組み立てることが非常に容易となるのである。

したがって、担保は、通貨のもつ投資活動を容易ならしめる機能の証明であり、また現実をみても担保提供者のほとんど大部分が投資資金のためのものであることは通貨の機能の一つに投資機能が挙げられるべきであるということの証査でもある。

だから、従来の通貨についての、①一般的購買力・一般的価値尺度、②価値保蔵性、③運搬性、の他に、④として投資機能とでも名付くべきものをあげたいと考えているものである。

7. 現在の管理通貨増加のありかたと通貨増加の基本原理

本稿の主目的は剰余生産物を貨幣化、すなわち利潤実現のための通貨増加分は、どのようにして、どこから生ずるのであるか、ということであった。

したがって、ここで現在の不換紙幣の増加はどこからどのようにして生ずるのであるかをみることにしよう。

A. H. ハンセン (Alvin Harvey Hansen, 1887-1975) は、通貨増加のプロセスに関して次のように叙述している。

「実業家が経営を拡張することを決意し、したがって付加的な固定資本や運転資本のために支出することを決意するとしよう。彼らは一部は自己資金を投資し、一部は資本市場から借り入れ、また一部は銀行から借り入れる。かくして、貨幣数量は、彼らが有利な投資の機会をみつけるからこそ増加す

るであろう。貨幣供給の増加は投資活動の結果なのである。(傍点——有田)⁵⁾と。

うまく運行している状態にあるところの、しかも管理通貨（不換紙幣）制度のもとにおける資本主義経済では、なるほど上述のように「貨幣供給の増加は投資活動の結果なのである。」という状況はありうるであろう。しかし、管理通貨制度のもとになく、貴金属通貨にのみ信頼を置かざるをえなかった初期資本主義の時代でも投資活動を起点として貴金属通貨を増加させることができるのか、特に貴金属非産出国においてはこれはまったく不可能である。だから、投資活動の結果として貨幣供給が増加するというようなことは、通貨供給増加の説明の出発点としては不適切なことは明らかであろう。

ある種の反論が予想されるので、さらに説明を重ねることとする。

貯えられていた（または死蔵されていた）貴金属通貨が、投資活動が活発となった結果、投資にまわされることによって、その経済社会に流通している貴金属通貨の量は増加するであろう。しかし、貴金属非産出国の、この貯えられた貴金属は、どのようにしてやってきたのかが基本的問題である。

紙を印刷して紙幣を作るようなわけにはいかないから、貴金属非産出国の場合には投資活動が活発となり、経済規模が拡大すればするほど通貨不足は深刻となり、デフレ状態が進行し、生産物の価格は下落する。したがって経済計算は困難となり、すなわち剰余生産物を貨幣化し、利潤を実現することはますます困難となり、通貨不足の面から経済は失速し、近代資本主義経済の成立へと進むことができなくなると考えられる。

別言すれば、貴金属非産出国が近代国家たるためには、すなわち経済成長・発展にみあった通貨増加が可能のためには、外国貿易に伴う貴金属流入以外に方法はないということである。貴金属産出国であっても、自国に必要な量、すなわち、経済拡大・成長にみあった量を産出できない場合は外国貿

5) Alvin Harvey Hansen, "Monetary Theory and Fiscal Policy," McGraw-Hill Book Company, New York, 1949, p. 173, 邦訳, 小原・伊東共訳『貨幣理論と財政政策』有斐閣, 206頁。

易による貴金属流入を必要とすることはいうまでもないであろう。

以上のような理論的次第であるから、信頼のおける通貨の存在と供給が近代社会の経済にとって不可欠のものであるという大前提を認めるならば次のように言ってもよいであろう。すなわち、資本主義成立・発展の条件の一つとして貴金属の存在と供給増加が不可欠の条件であり、したがって貴金属について産出国と非産出国が存在する限り、そして、物々交換・交易によってひきおこされる効用増加・生産性増大・富の増大を認めるならば、外国貿易・隔地間交易なき資本主義はありえないということになる。

8. 交易と経済成長

このような外国貿易と利潤追求に焦点をあわせた立場から経済史をひもとくと、商業、特に隔地間交易を行う商人に行きあたる。これは古代までさかのぼりうるが、資本を投下して商品を仕入れ、遠隔地に運び、他の商品と交換して利潤を獲得するという点では、いずれも同じことであるから、伝統にしたがって、ベニスの商人達を代表として考察をはじめることである。

アダム・スミスも『国富論』の中で明言しているように、水運は陸運とちがって比較にならぬほど多量の商品を安い運賃で運ぶことができる。したがって、水運に都合の良い地方は交易が発達する。水の都ベニス、未発達な航行術の時代でも利用できる内海たる地中海をひかえており、隔地間貿易に好都合な地理的条件をそなえていた。商人達は各地方の特産物交易の仲介を行い、仕入れ・売買のとき差額が生じた場合にはその差額は貴金属・宝石類という商品で埋め合わせていた。そして、富を蓄わえるときには、宝石・貴金属で蓄えていた。

分業は生産力を高める。とくに職業的分業は交換・交易が保証され、拡大が行われる限り、分業のもつ、したがって交易のもつ生産力増強は無限の可能性を含んでいる。アダム・スミス (Adam Smith 1723-1790) はこれに

ついで次のように述べている。「分業をひきおこすのが交換力 (power of exchanging) であるように、その分割の範囲もまたつねにこの力の大きさによって、いいかえれば、市場の広さによって制限されざるをえない。市場がきわめて小さいばあいには、だれ一人として一つの仕事に献身するための刺激をうけることができない⁶⁾と。そしてその具体例をいくつかあげているが、その中の代表的なものとして次のようなものがある。「いなかの大工は木材でつくられるあらゆる部類の仕事に従事し、いなかのかじ屋は鉄でつくられるあらゆる部類の仕事に従事する。前者は、大工であるばかりではなく、指物屋であり、家具屋であり、木彫家でさえあると同時に、車輪工であり、すき製造人であり、荷馬車や大型馬車の製造人でもある。後者の仕事となるとさらにいっそうさまざまなものである。スコットランドの高地地方の遠くはなれた内陸地方では、くぎ製造人のような職業でさえ存続することは不可能である。一日に一千本の割合でくぎをつくるような職人は、一年に三百日働くとして、三十万本のくぎをつくるであろう。けれども、このようなところでは、一年に一千本、つまり一日分の所産を売りさばくことさえ不可能であろう。」⁷⁾

かくて、分業のもつ生産力増強をして効果あらしめるためには、市場拡大が不可欠であるということが理解される。市場拡大は面積的な意味だけではなく、物流の量的拡大もまた市場拡大であることを明確に把握しなければ正しい理解には到達しえない。

スミスは陸運のみによるよりも水運によるほうが、いっそう大きな市場がえられるとして、次のような例をあげる。

「水運によるほうが、陸運だけで提供しうるよりもいっそう広大な市場を

6) アダム・スミス著、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』第一分冊、岩波文庫、124頁。(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed., by Edwin Cannan 6th ed. p. 19)

7) アダム・スミス著、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』第一分冊、岩波文庫、125頁。(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed., by Edwin Cannan 6th ed. p. 19-20)

あらゆる部類の産業に開放するように、あらゆる種類の産業が自然に細分され改善されはじめるのもまた、沿海方面や航行可能な河川の岸にそってであって、そういう改善が国の内陸地方にひろがるのがよくあるのも、そのずっとあとになってからのことなのである。二人の御者がのった、広輪で八頭だての大型馬車は、ほぼ四トンの貨物を積み、ロンドン・エディンバラ (London and Edinburgh) 間を約六週間の日程で往復する。六人ないし八人がのり組み、ロンドン・リース (Leith) 両港間を航行する船は、ほぼ同一時間に、二百トンの貨物を積んで往復することがよくある。それゆえ、六人ないし八人は、水運の助けをかりるばあいには、同一時間に、百人の御者がのり、四百頭の馬がひく五十台の広輪の大型馬車に積めるのと同一量の貨物を、ロンドン・エディンバラ間に往復させることができる。」⁸⁾

このように、水運は陸運に比して、太い大きな物流パイプとして作用するものであるから、水運の存在・発達は、分業→交換・交易→生産力増強という図式に大きな効果を与えるものである。スミスは、前のロンドンとエディンバラ間の例について次のように言う。「これらの両都市は、現在ではたがいにいちじるしく多額の商業を営んでおり、たがいに市場を提供しあいながら、そのおのおのは他の産業にかなり多くの刺激をあたえているのである」⁹⁾と。

スミスはまた次のように言う。「したがって、もしこれらの両地のあいだに、陸運以外の交通の便というものがなにもなかったならば、価格が重量の割合にひじょうに高いような貨物を除けば、どのような貨物も一方から他方へ運送されなかったであろうから、両地は現在両地間に存続している商業の一小部分しか営むことができず、したがってまた、現在この両地のおのおの

8) アダム・スミス著、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』第一分冊、岩波文庫、125-126頁、参照。(Cf. Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed., by Edwin Cannan 6th ed. p. 20)

9) アダム・スミス著、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』第一分冊、岩波文庫、127頁。(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed., by Edwin Cannan 6th ed. p. 21)

1987年6月 有田 稔：資本主義，その生成の理論のために

が他方の産業とたがいに提供しあっている刺激の一小部分しかあたえあうことができなかつたであろう。」¹⁰⁾と。

このような次第で，水運に有利な地理的条件を備えたところには，経済が発達し，豊かになることが可能であるということになる。かくて，地中海にベニスの商人によって代表される交易資本主義とでも名付けたい商業資本主義が発達したことが理解される。これに関連したことをスミスは次のように述べている。

「最も信頼すべき歴史によれば，最初に文明が開けたのは，地中海（Mediterranean sea）の沿岸ちかくに居住していた諸国民であつたらしい。世界きってのはるか最大の入江で，潮の干満がまったくなく，したがって風がおこすほか波一つたたないこの海は，海面がしづかなこと，また数多くの島があること，さらには隣接する岸がちかいことのために，幼年時代の世界海運にとってはなほだしく好つごうであつたし，また当時の人々は，羅針盤を知らなかつたから，海岸線を見失うことを恐れ，また造船術も不完全であつたから，大洋の荒れ狂う大波に身をまかすことを恐れていたのである。ハーキュリーズの円柱（piliars of Hercules）をこえること，つまりジブラルター海峡（Streights of Gibraltar）から外洋へのりだすということは，古代世界では，最も驚異的な，危険このうえもない航海上の冒険だ，とながいがいあいだ考えられていた。」¹¹⁾

9. 多様性の追求と効用価値の増大

前節でみたごとく，地中海のもつ好条件とそれを利用できる水準にあつた水運との結合が隔地間交易を発達させたのであるが，この隔地間交易の発達

10) アダム・スミス，同書，126頁。Ibid., p. 20.

11) アダム・スミス著，大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』第一分冊，岩波文庫，128-129頁。（Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed., by Edwin Cannan 6th ed. p. 21）

は、それが何らかのメリットをもっているからこそ継続性と成長性をもっていたことは当然である。

このメリットは、必ずしも今日言うところの利潤とは限らない。今日の利潤が成立する以前を理論的に解明して、利潤の本質に迫りたいと思う。

そもそも、本来人間というものは「多様性」を求めるものであり、物的には生活用品等の種類が増加することを歓迎する傾向にある。ところが、逆にある特定の商品の数量が増加すればするほど人間にとって有難味が減少してゆき、主観価値が低下してゆくものである。すなわち、限界効用が逓減するのである。そこで、この効用の下がった商品を、それを生産できない遠隔地に運び、効用価値・主観価値を高く評価させ、また他方、その遠隔地の産物で、自分達には珍しいもの、すなわち自国では効用価値・主観価値の高く評価されるものと交換し、もち帰ることによって、限界効用の逓減していた自国産品の効用価値を間接的に高めることができるのである。

一例をあげれば、海岸地方では大量に生産でき効用価値の低い塩を、岩塩もない内陸にもちこめば美しい毛皮や美しい陶器を交換にもって帰ることができる。

昔から、商業は直接的には何ら具体物を生産するものではないから、ヨーロッパにおいても、日本においても非常に軽視されていた。しかし、交易は限界効用価値説・主観価値説の立場からみれば、価値を生産し、増加させるという効果をもっているということになる。

ヴェニス商人達は、ヴェネチアン・ガラスの輸出のみならず、一見何ものをも生産しないようにみえるところの各地方間の隔地間交易を仲介することによって巨万の富を築き、美しい、豊かな水の都を築いていったのである。

このように豊かになり富がえられるから、交易は必然的に商品生産に増産刺激を与える。つまり、ある地方に美しい陶器生産が発達し、その陶器と交換に、美しい織物、珍しい果物、優秀な刃物等が手に入り、生活が便利で豊かになると知れば、美しい陶器の生産に熱心になり、それを増産しようとするのは当然の帰結であるということである。

このことは美しい織物を作っている地方にとっても、珍しい果物を作っている地方にとっても、優秀な刃物を生産している地方にとっても、同じような生産増加刺激を与えることは明らかである。

かくて、交易は双方に、多方に生産増加効果を生みだし、特殊化と交換・交易を通じて経済社会の発展・成長に寄与するものであると云うことができるのである。

ここで、交易の生みだす効果として、次のような事柄を整理確認しておこう。

1) 第一に交易は何ら具体的商品を生産するものではないが、効用価値を高める効用増加効果をもち、それによって社会や個人を豊かにし富ませる富裕効果をもつ

2) 第二は効用が増加し生活が豊かになるので双方（あるいは多方）が自己の特産物・輸出品を増産しようとする増産効果をもつ

3) 第三にはそれが多角交易の場合には、人間の多様性を求めるという性向からみて、一層大きな増産効果をもつ

4) 第四としては、豊かさの向上を求めて市場拡大を望むようになり、市場が拡大もしくは増大すればするほどヨリ一層増産刺激が大きくなる。

このように、交易は生産増加に多くの大きな刺激を与えるものであるから、何かを契機として大量生産方法の開発へと進む条件はできあがっていたと考えられる。

10. 交易者余剰

以上みたように、職業的分業、たとえば農業と漁業とか弁護士とタイピストといった分業と協業は生産能率を高めるということは衆知のところである。

また他方デュピュイ (Arsene Jule Étienne Juvénal Dupuit, 1804-1866) やマーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) の唱える「消費者余剰」の考えも、かなり有名なものである。

「職業的分業」と「消費者余剰」、特に直接的には後者の考え方にもとづけば、交易をおこなうものには、双方に交易者余剰とでも名付けうる余剰が存在すると思われる。

例えば、A国では砂糖^{キビ}黍の栽培に適しており、砂糖が大量に生産され、砂糖の限界効用は非常に低い。すなわち砂糖の価格は非常に低廉である。他方、B国では良い海岸にめぐまれ製塩技術が発達し、塩が大量に生産され塩の限界効用は非常に低くなっており、有難味も少なく、価格は非常に低いとしよう。

このような事情にあるとき、A国とB国とが余った砂糖と塩とを交換すれば、「多様性」を充たし、また限界効用を高めうることは明らかである。このとき双方に生まれる効用総計の増加が交易者余剰と呼びうるものである。

周知のごとく、等質・等量のものであっても、数量が増加するにつれて、その品物に対する主観価値・効用は逓減する。その効用逓減は絶対的数値で示しうるものではないが、相対的数値としては示しうるものである。これは「限界効用逓減の法則」としてつとに知られているところである。また他方、ある種の商品の供給が増加するにつれて価格が下落するというのも、言うを要しないほど一般に認められているところである。

このことは、正確ではないにしても、限界効用の上下が価格の騰落に反映することを意味している。

したがって、上例の砂糖生産国たるA国と塩生産国たるB国とについて、価格形成の中心となるべき効用、価格に反映する効用について、交易・交換前と後を表示すれば次のようになる。言うまでもなく等質・等量の砂糖袋8袋と塩袋8袋とが仮定されている。

$$\text{交換前} \left\{ \begin{array}{l} \text{A国, 砂糖, } 10+9+8+7+\frac{6+5+4+3}{\text{交換用}}=52 \cdots \cdots \text{交換前のA国のもつ効用の総計} \\ \text{B国, 塩, } 10+9+8+7+\frac{6+5+4+3}{\text{交換用}}=52 \cdots \cdots \text{交換前のB国のもつ効用の総計} \end{array} \right.$$

交換後	{	A国	{	砂糖， 10 + 9 + 8 + 7 = 34	}	68	交換後のA国のもつ効用の	総計
		塩， 10 + 9 + 8 + 7 = 34							
	{	B国	{	塩， 10 + 9 + 8 + 7 = 34	}	68	交換後のB国のもつ効用の	総計
		砂糖， 10 + 9 + 8 + 7 = 34							

交易・交換前にはA国，B国はそれぞれ52の効用をもっていたが，交易・交換後には，それぞれ68の効用を所持するようになった。68-52=16の効用増加である。

交易・商業は具体物を何も生産するものではないという意味では，ここには何もかも新たに生産されたものは存在しない。しかし，交易・交換用の資本と労働を投下することによって効用価値を増加させ，社会を豊かにし，富ませているのである。

「職業的分業」は国家間では「国際的分業」としてあらわれる。国際的分業は，かの有名な「比較生産費説」において説かれるように生産性を高める効果をもつ。その上，「限界効用通減の法則」と「多様性の原理」が働いているので，人間は常にチャンスがあれば交易を拡大しようという欲望をもっており，その交易が多角貿易である場合には，その交易拡大欲は大きなものとなるであろう。かくて市場拡大が進み，交易が拡大すると，交換用・輸出用の国産品の生産増加を刺激することとなる。

交易は直接的には双方の総効用を増加させ効用価値を増加させることによって社会を富ませる，そして間接的には双方の自国産物について増産の刺激を与える。この増産刺激は投資を促がし，雇傭増加をもたらし，遂には人手不足が到来すれば生産技術の改善・開発を促進するに至る。

このように交易は直接的，間接的に，社会を富ませるとともに生産力向上の刺激を与えるものであるといえる。

この考えからすれば，外国貿易は単に商品をいれかえるだけのことであって，何もかも生産したり，付加したりするものではないという考え方は再考・吟味を要するということになるであろう。

もう一度繰り返すことになるが、この考え方は事後的に考察することから生ずるものであって、事前的に考察するならば、交易はメリットのあるものであるから、交易市場の拡大、交易の多角化（多角貿易）への欲求が進み、外国貿易が進むから、必然的に大量生産方法の開発、産業革命へと進展するものであるから、外国貿易なき資本主義はありえないということになるのである。

11. 貴金属通貨と資本主義成立への経済史的アプローチ

だから、資本主義発生のためには、商品市場拡大（有効需要増大）が先行しなければならない。その市場拡大はどのようにしてあらわれたか。ピレンヌ（Henri Pirenne）は次のように述べている。「商業活動の萌芽的な現われが見られたのは、ヨーロッパ大陸の両端、すなわちイタリアとネーデルランドであった。ヨーロッパをその間に差し挟んで大西洋へ突出させている二つの内海が、そうした活動の最初の中心となった。ヴェネツィア、つづいてジェノヴァおよびピザは、地中海の岸辺づたいに沿岸貿易に乗り出して東ローマ帝国や回教諸国のような富裕な隣邦との交易をつづけ、しかもそれはその後ますます増大していった。他方、ズウェイン河口の先端にあるブリュージュはイギリス、北ドイツ沿岸、さらにスカンディナヴィア諸地域へむかって放射状に延びる海上商業の中心地となった。かようにして経済生活は、古代ギリシャの初期とまったく同様に、まず海岸に沿って活動的となった。しかし間もなくそれは内陸に浸透していった。河川および自然のルートに沿って一步一步その路を拓いていく。彼方でも此方でも、出入の多い海岸線のためにいくつもの海港を控えているような内陸の地域を目覚ませていく。こうした発達過程のうちに両つの動向が遂に相会し、北欧の人々と南欧の人々とがたがいに連絡をたもつに至った。すでに一二世紀の初頭には、それは既成の事実となっている。一一二七年にはロンバルディアの商人たちが、アルプスの峠を下ってシャンパーニュへ、さらにネーデルランドへと長途の旅のす

えフランドルンの大市に到着している。」¹²⁾

このように内海という地理的条件に恵まれたところから沿岸貿易がはじまり、河川を通じて内陸におよぶという順序で市場拡大が行われたと考えられている。

水運の便益は先に『国富論』からの引用でみたところであるが、このように大きな便益が生まれるためには、原始的な一人乗り、二人乗りのカヌーで代表されるような初期の舟では不可能である。造船技術の進歩によりより巨大・堅牢な船舶が建造されるにつれて、交易拡大＝市場拡大＝有効需要拡大→供給不足→価格騰貴→利潤増大→生産拡大→人手不足→生産技術進歩・改善という経路が成りたつといえよう。

このような経路で発展したのが、有史以来1492年までの地中海沿岸諸国である。これについては前に引用したアダム・スミス（Adam Smith, 1723－1790）の叙述があるが、その終りの文をもう一度思い出してほしい。すなわち、「ハーキュリーズの円柱（pillars of Hercules）をこえること、つまりジブラルター海峡（Streights of Gibraltar）から外洋へのりだすということは、古代世界では、最も驚異的な、危険このうえもない航海上の冒険だ、とながいがいだ考えられていた。」¹³⁾

12) アンリ・ピレンヌ著、大塚久雄・中木康夫訳『資本主義発達の諸段階』未来社、1955年初版、1969年版使用、23－24頁。〔Henri Pirenne, *The Stages in the Social History of Capitalism*, Academic reprints, p. 8.（出版社名なし、国会図書館蔵）〕

本書の3－4ページ「凡例」とかかれたところに、本書の原典について次のように書かれている。「本書には、資本主義の起源に論及したアンリ・ピレンヌ（Henri Pirenne）の論文二篇の邦訳を収録した。第一論文は Henri Pirenne, *The Stages in the Social History of Capitalism*, American Historical Review, Vol. XIX, No. 3（April, 1914）pp. 494－515. である。

この論文はフランス語版が、ほとんど時を同じうしてベルギー学士院の紀要に Henri Pirenne, *Les périodes de l'histoire sociale du capitalisme* (Bulletin de l'Académie Royale de Belgique, Classe des lettres, 1914) の表題で発表され、さらに数年後単行本 Henri Pirenne, *Les périodes de l'histoire sociale du capitalisme*, Librairie du «Peuple», Bruxelles, 1922, 24 pp. として公刊されている。」

13) アダム・スミス、前掲書、129頁。Ibid., p. 21.

ところが、このハーキュリーズの円柱（pillars of Hercules）をこえること、そして外洋にのりだすことを可能にする新結合がおこったのである。このことによってヨーロッパ世界の事情は大きく変わることとなった。

古くは一般に産業革命は①羅針盤、②火薬、③活字（印刷術の発達）によってもたらされたといわれていたが、スミスも触れているごとく、確かに羅針盤はヨーロッパの船舶を大西洋に乗りだすことを可能にした。また火薬という表現で一括される鉄砲・大砲類は、言語の通じない異民族とのトラブルが生じたときヨーロッパ人を守り、また異民族にヨーロッパ人の意志を強要することを可能にした。

特に羅針盤は船舶の行動範囲をとつともなく拡大し、隔地間交易の範囲を画期的に拡大した。これはヨーロッパ世界に大きな経済的刺激を与えたであろうことは確かである。正確に言えば、外洋へ乗り出す行為そのものが背後からの経済的欲望によって支えられ促進されて実現したものとすら言いうるのである。

この新世界に向かっている隔地間交易拡大がヨーロッパ世界（旧世界）に与えた経済的刺激という観点から、資本主義経済の成立という主題を中心に、経済史関係の著書三冊の中に関連事項を求め一覧表にすれば次のように整理しえた。

この一覧表にみられるように、商業・交易による利潤追求は古くから存在し、古代にまでさかのぼりうるとされている。本稿の目的からは、13世紀にギルド的都市と遠隔貿易都市の二種類の都市が発生したことが注目にあたいするところである。というのは遠隔貿易都市の発生は、輸出目当ての生産発生、工業の地域的集中とともに、近代的資本主義の芽と考えられる交易用産業の発生を示すものであるからである。

この傾向は15世紀に入ると、毛織技術の発展・進歩とともに、ヨーロッパ内で毛織物の輸出入が激増し、特に羊毛輸出国であったイギリスへオランダから毛織の熟練織布工が大量に流入してきたため、原料たる羊毛と熟練織布工とを兼備したイギリスは非常に有利な輸出国となりはじめた。

“近代資本主義成立” についての経済史的アプローチ¹⁴⁾

(人名は引用書の著者名，西暦年以外の数字は頁を示す)

	11世紀	商人・商業の時代 23, 26, 28-31 (Pirenne)	
	12世紀	資本主義的なものの萌芽 11 (")	
	13世紀	二種類の都市が生まれる(ギルド的都市・遠隔貿易都市) 38-40 (")	
		輸出目当ての生産発生 15 (")	
		工業の地域的集中 44-45 (")	
		金貨の鋳造再開 41 (")	
	14世紀	農村工業発生 84, 124 (")	
		フランドルに原綿出現 Cotton burt 258 (Mantovx)	
enclosure		多数の毛織物商人出現 113 (Ashley)	
エンクロージャー		ステーブル(一定市場)出現 100 (")	
羊毛用		ステーブル(一定市場)指示 93 (")	
26 (Ashton)		ステーブル(一定市場)商人出現 93 (")	
		イギリス海外貿易自立 102 (")	
	15世紀 前半	毛織物輸出 50% 増 114 (")	
	15世紀末から 後半	毛織物輸出 300% 増 114 (")	
		熟練織布工来英 112 (") 106-107 (Pirenne)	
		1492 コロンブス新世界発見	
		1497 パスコ・ダ・ガマ，インド航路開拓「希望峰」沖を通過	
	16世紀	貴金屬流入 49 (Pirenne), 6 (Harod)	
		マニュファクチュアの発生 129, 131, 132 (Pirenne)	
		輸出工業 133 (Pirenne)	
木		世界市場向け生産 96-99 (")	
炭	42-44 (Ashton)	近代工業的性格 83 (")	
製	247 (Mantovx)	資本主義的企業 93 (")	
鉄		ヴェニス商人特権を失う(イギリス) 106 (Ashley)	
		木材資源枯渇 248 (万有百貨)	
		宗教的な騒乱 105 (Pirenne), 97 (Ashley)	
	1545	ギルド商品の衰退 78-80 (Pirenne)	
		ギルド的反動 135 (Pirenne)	
	1585	綿織機 イギリスへ 258 (Mantovx)	
		価格騰貴 80-81 (Pirenne)	
物を売れば多くの金銀が手に入るといふ形の価格騰貴	1585	利潤追求激化 80, 33 (Ashley)	
	1598	労働需要増大 136-137 (Ashley)	
エンクロージャー(三百年間)		スペイン・オランダ・フランス・イギリス各国の船乗り達の新世界での斗争 34(Pirenne)	
	17世紀 1610	木綿工業の最初の文献(イギリス) 258 (Mantovx)	
		1655 ロンドン大疫	
		イギリス他国と平等に競争を始める 87 (Ashley)	
	1688~1769	農業人口減少・工業人口増大 150-151 (")	
		輸出伸び悩み・失業者増大 145-146 (")	
	1694	イングランド銀行創業	
	末期	インド貿易の発展 259 (Mantovx)	利半
	18世紀 1700	木綿の染染織物輸入禁止 259 (")	子世
	初期	製鉄が木炭の代わりに石炭を用いるようになる 43-44 (Ashton)	率紀
	1717	本格的工場出現 36 (")，イギリス金価格の決定 3(Harod)	低間
	1740年代以降	イギリス人口の大躍進 44 (K大辞)	下) 11
1700年		1760年までは革命的变化は起こらなかった 62 (Ashton)	↓(Ashton)
石炭 250万 t 42(Ashton)		イギリス オランダに代わって大海運国となる 87 (Ashley)	
		資本家の萌芽 201-202 (")	
		貿易による利益 157 (")	
	1771	ワットの蒸気機関 44 (K大辞), 54 (Pirenne)	
産	1780年以降	綿花輸入激増 46 (K大辞)	
蒸業	1776	アダム・スミス『国富論』公刊	
気革	1789~1799	フランス革命	
機命		綿工業の発展→生産方法の発達 263 (Mantovx)	
関	19世紀 1819	金本位制度確立	

16世紀に入ると、15世紀末の新世界発見によって貴金属が大量にヨーロッパ

14) 経済史的アプローチに用いた主要文献

1. アシュリー著, アレン増補; 矢口孝次郎訳
『イギリス経済史講義』有斐閣, 昭和33年
“THE ECONOMIC ORGANISATION OF ENGLAND”
an Outline History by SIR WILLIAM ASHLEY With Three
Supplementary Chapters by G. C. ALLEN LONGMANS, GREEN
AND CO; LONDON, NEW YORK, TORONT 1949
2. ポール・マントウ著; 徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明訳
『産業革命』東洋経済新報社, 昭和41年, 初版39年
“LA RÉVOLUTION INDUSTRIELLE AU XVIII^e SIECLE”
Paul Mantoux, Éditions Génin, Paris, 1959
3. ピレンヌ著; 大塚久雄・中木康夫訳
『資本主義発達の諸段階』未来社, 1969年, 第一刷 1955年
アンリ・ピレンヌ著, 大塚久雄・中木康夫訳『資本主義発達の諸段階』未
来社, 1955年初版, 1969年版使用, [Henri Pirenne, *The Stages in the
Social History of Capitalism*, Academic reprints, p. 19. (出版社名
なし, 国会図書館蔵)]
本書の3-4ページ「凡例」とかかれたところに, 本書の原典について次
のように書かれている。「本書には, 資本主義の起源に論及したアンリ・ピ
レンヌ (Henri Pirenne) の論文二篇の邦訳を収録した。第一論文は Henri
Pirenne, *The Stages in the Social History of Capitalism*, *American
Historical Review*, Vol. XIX, No. 3 (April, 1914) pp. 494-515. であ
る。
この論文はフランス語版が, ほとんど時を同じうしてベルギー学士院の紀
要に Henri Pirenne, *Les périodes de l'histoire sociale du capitalisme*
(*Bulletin de l'Académie Royale de Belgique, Classe des letter*, 1914)
の表題で発表され, さらに数年後単行本 Henri Pirenne. *Les périodes de
l'histoire sociale du capitalisme*, Librairie de «Peuple», Bruxelles,
1922, 24 pp. として公刊されている。」
「第二論文は Henri Pirenne. *Une crise industrielle au XVI^e siècle,
— La droperie urbaine et la «nouvelle droperie» en Flandre.*
Bulletin de l'Académie Royale de Belgique, Classe des lettres, 1905,
No. 5 pp. 489-521. である。」
4. R. F. ハロッド著; 村野孝・海老沢道雄訳
『安定成長の通貨政策』至誠堂, 昭和35年, 第1刷
“POLICY AGAINST INFLATION” by R. F. HARROD MACMILLAN
& CO LTD, 1958
5. 相賀徹夫編『万有百貨大事典, 9, 世界歴史』, 小学館, 昭和50年。
6. 「K大辞」=「経済学大辞典Ⅲ」東洋経済新報社, 昭和55年。

1987年6月 有田 稔：資本主義、その生成の理論のために

パに流入しはじめ、商品購買力が増加し、それが交易用商品増産のためのマニファクチュアを発生させ、輸出工業が、旧世界と新世界を含めた世界市場向け生産を行うようになり、マニファクチュアは近代工業的正確を帯びるようになり資本主義的企業へと成長しはじめた。ここに至って従来の地中海とその延長としての北欧にまで延びていたヴェニス¹⁵⁾の商人を代表とする、中世的・地中海的商業は、その歴史的使命を終えることとなった。

16世紀のイギリスにおける木材資源枯渇は製鉄に石炭使用ではなく木炭使用を行っていた頃のことであり、これは鉄需要の増大・製鉄のさかんなことを、したがって産業がさかんにおこっていたこと、また燃料がネックとなっていたことを如実に示すものである。大まかに言えば宗教的騒乱は、単なる宗教的相異によるものではなく、金利を取ることの正当性とか利潤追求の正統性を認める新しい教義を唱えるプロテスタンティズム¹⁵⁾と中世的・カソリック的教義との闘いであり、資本主義的性格の正当性を主張する新興有産階級の台頭を物語っているものである。

価格騰貴は、購買力の増加、すなわち通貨の増加を意味し、一方では容易な利潤獲得、したがって、利潤追求激化が生じ、経済の高度成長状態が出現し、生産設備の拡張、労働需要増大等一連の経済の活発な動きをひきおこし、他方では中世的ギルド商品の衰退（すなわち交易用・輸出用の大量生産商品による攻勢）によってギルドが抵抗空しく崩壊してゆき、またイギリスではベニスの商人が特権を失うに至り、ついに地中海時代は終りをつけ、近代資本主義への一つのハードルを越えるに至らしめた。

私が特に注意を促したいのは、16世紀の価格騰貴である。15世紀末に新世界が発見され、旧世界に新世界から貴金属が流入してきた、これが需要、購買力を造出し価格騰貴となったと考えられる。この価格騰貴は利潤を増大させ、その利潤は貴金属通貨で蓄積されるから、好況の中では、投資にまわす

15) ウェーバー著、阿部行蔵訳、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」、(所収『ウェーバーの思想』世界思想教養全集18、河出書房新社、昭和37年、229-341頁。)参照。

のが非常に容易である。製鉄用の木炭のための燃料たる木材資源が枯渇するという事は、かなりの高度成長を物語っている。

かくて、次の図式が描かれる。①新世界の発見→②貴金属の流入→③価格騰貴→④利潤追求→⑤生産設備への投資活発化（木材資源の枯渇）→⑥労働需要増大。

これは典型的な高度成長のパターンである。資本主義経済社会は歴史上どの点で成立したかを明確に断定することは困難であるが、しかし、通貨のない物々交換的交易のみの発達では、円滑な利潤実現と投資機能に欠けるから、近代資本主義社会は成立しなかったと考える方が正しいであろう。

したがって、近代資本主義の成立は次のように考えるのが正しいであろう。「羅針盤が船を沿岸航海から遠洋航海へとひっぱりだしたとき、大西洋に面しているがゆえにいつも大西洋の彼方に思いをはせていたポルトガルとスペインが大西洋にのり出し、新世界を発見し、過去数千年にわたって金（キン）を蓄積していた南米大陸を植民地として手に入れ、インカ王の身代金で有名な莫大な金（キン）を継続的に本国にもちかえるようになった。

かくてポルトガルやスペインにおいては金（キン）がダブつきインフレ気味となる。物価は高騰し、金（キン）は『国内には有利な市場を発見することが出来ないから、禁止令のあるにも拘らず外国に送られ、国内に一層有利な市場を有する貨物と交換される』¹⁶⁾ようになる。そして、その金（キン）を手に入れようとイギリスは交易用の商品を増産することになる。かくてイギリスの産業は発展への動因を与えられ、他方、ポルトガルやスペインは、国際通貨たる金（キン）で表した国内貨銀は金（キン）インフレによって高騰し、この高い貨銀を生産費のベースとするスペイン産の商品は当然高価格となるので輸出できず、したがって大量生産への刺激も少なく、ポルトガルやスペインは産業が発展しなかったと考えられるのである。ケインズはいう。『15世紀の後半および16世紀におけるスペインの経済史は、貴金属の過剰が貨銀単位に及ぼす効果によって外国貿易が破壊された国の一例を示してい

16) 野村兼太郎，前掲書，284頁。

る。』¹⁷⁾と。』¹⁸⁾

そして、羊毛という原料とオランダから流入してきた優秀な毛織職人の技術を兼備していたイギリスは、昔とちがって気前よく買物をするようになったポルトガル・スペインを相手に、儲けたいがために（利潤獲得欲から）その当時としては画期的大量生産方法であった工場制手工業（manufacture）を発生・発達させた。このマニファクチュアの生産物をポルトガル・スペインに販売したが、ポルトガル・スペインは輸入が大きく輸出が小さくなくても、生じた差額を金（キン）で支払うことができたので、何らの苦痛もなしに買いつづけることができた。これらの金（キン）が、イギリス国内では増加通貨として、利潤実現を容易にし資本金として、投資機能を発揮しさらに経済を成長させることを容易にしたのである。長期にわたって需要は尽きることのないかのように湧くがごとく押し寄せ、この状態が100年、200年の期間続いたのでイギリスでは工業が発達し、遂には産業革命と称せられる状態を現出するにいたったと考えられるのである。

12. あとがき

本稿は、前拙稿「『独立投資』発生に関する試論」¹⁸⁾を、別の角度から考察しようとしたものである。原理とか原論というものは理論を根源までさかのぼろうとするものであり、また根源から、原点から理論を構築しようとする性向をもつものである。

資本主義経済がどのような要件の積み重ねによって、またどのような要因の結合によって生成したかを説明することは、経済理論にとってのみならず、

17) J. M. ケインズ著、塩野谷九十九訳『雇傭・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社、昭和16年初版、昭和57年版、379頁。

(John Maynard Keynes, "The General Theory of Employment, Interest and Money", Macmillan and Co., Limited, 1936, p. 337)

18) 「徳山大学論叢」第25号、1986年6月、徳山大学経済学会、拙論、「『独立投資』発生に関する試論」参照。

経済政策にとっても有用なものである。

本稿で試みた「交易者余剰」の概念, 「通貨の投資機能」は, 何ら初めから意図したものではなく, 資本主義経済の生成を可能な限り論理的整合性をもつ形で説明しようとする過程で発生したものである。これらがいささかでも同学の士の御役にたてば筆者の喜とするところである。